



4 対話する場をつくる 現象学としての書道

生涯発達支援塾TANE 櫻井育子

はじめに

5月21日は、「世界対話の日」だということで、ちょうどこの期間の書道イベントを「対話する書道のじかん」として設定してみた。考えれば考えるほど、この「対話」ということばはたくさんの場所で使われているし、最近では学校での学びについて、「主体的対話的で深い学び」を重視する、などと使われている。もちろん精神医療の世界や相談場面でも「オープンダイアログ」の有効性は高いと言われ、教育、福祉の世界ではあたりまえに「いいもの」とされている言葉ではある。しかし、はたして「対話」とは何か。なぜそれが人々にとって必要とされ、重要視されてきているのかということ、書道の時間を通して考えてみたいと思った。というのも、「誰でも調子に乗れる書道塾tane」とは、まさに毎回が対話の時間になっているのではないかと、来てくれている方々が気がついてくれたことが大きかったからである。

対話の土台

書道塾taneの特徴は、①教えない、②何を書いてもいい、③評価しない、の3つである。①については、わたし自身は書道の師範ではあるが、そもそも「書」にはルールがあるわけではないので「こう書きましょう」ということを教えることはないし、文字の見本として何かきっかけがないと書けないという方には書くことはあるが、基本的には「手本」がない。②は、年齢問わずに集まっているため、当然「筆を持ったことがない」という子どもから、「古典臨書を書きたい」という大人まで、実にさまざまなニーズがある。そのニーズにすべて応えることなどはそもそも不可能に見えるが、実際にやってみると、それぞれが好きな本を持ってきたり、黙々と遊んでいたりと、という自由空間が生まれた。③については、ここではいわゆる書道塾のように、級や段があったり、うまくなる練習をしたり、しているわけではない。提出することもないし、ゴールがあるわけでもない。なので、誤解を恐れずに言えば、ここにきて書道をやっても役には立たない。つまり完全に「自分だけの世界」を楽しむだけで、それについて誰も評価しない。この、「自分だけの世界」を、まずはたっぴりと味わうこと、そしてそれに、自分自身でOKを出すこと、それは子どもから大人まで全員ができるようになっていく。実はこのルールは、他者に教えない、どんな意見が出てもいい、意見について評価や判断をしない、という哲学対話のルールと同じであった。

書きっぱなし・言っぱなし

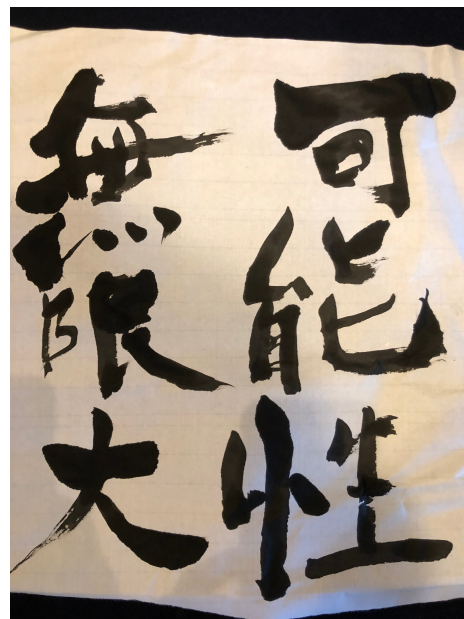
「自分だけの世界」を自分で肯定する。それが目に見える形で味わえるということは少ない。だからこそ書道は分かりやすい。わたしたちは「言葉」を使うが、だからといってそれで全てが伝わっているわけではない。ひとが書きたいものをひたすら書いているとき、それは「誰かに見せよう」と思っているわけではない。なので、書道で好きなものを描いている状態というのは、「ひとりごと」のようなものである。言葉にならないもの、感情、そういったものも自然に出てくる。書き終わってみると、なんとなく気恥ずかしい感覚になる大人は多いが、それでもその「ひとりごと」を手にとってながめ、「なかなかいいじゃないの」と思えたときの感覚は、自分の感情を肯定できた状態と同じではないかと思っている。

十分に書いた、と思うと、人は自分以外の人の書いたものに関心を寄せ、そこから一気に交流の時間が始まる。毎回この時間が、どのクラスでもどのイベントでも、自然発生的に生まれていて面白い。そもそも交流を目的としたわけではないから、終わってさっさと帰ってもよさそうなものなのだが、ひととおりに書き終わると、もれなく褒め合いが始まる。褒め合いといっても言いたいことを言っぱなしの小気味いいものだ。初対面だろうが常連だろうが、一気に深い会話をすることが多く不思議だなあと思っていたが、考えてみたら当然なのだ。「ひとりごと」を公開しているようなものである。その人の内面はととも出やすい。だからこそ、終わってからの語りの時間は、いつも深く心地よい。ある人は「温泉かサウナに行きたい」と表現している。書きっぱなし、言っぱなし、いろんなものを手放した感覚になるらしい。

書道対話のすゝめ

自分の視点（書いたもの）に他者の視点（言われること）が加わることで、それはエンパワメントされる。対話は「双方向のコミュニケーション」である。書道対話はその点で、自分自身との対話から始められるからこそ、その安心の土台の上に他者の表現や言葉を重ね、より「聴く耳」（柔軟性）が発達するのではないかと思う。書道塾を始めるときには予想していなかったことではあるが、確実にここに通ってきている方々の柔軟性、多様性、許容量が増している。ここで語っていく言葉がそれを物語る。明らかに否定語が減った。自分が褒められた瞬間の反応が謙遜ではなく「ありがとう」に変わった。これは、大人に限らず子どもでも同じである。

とてもシンプルなことではあるが、大事にしていることを大事にして生きたい、その願いが誰にでもある。それを追求していく作業が対話だとすれば、単なる共感でもなく、受容でもないやりとりである。今までは「言葉」に頼りがちだった対話に、「書」という自由な表現活動の可能性があるような気がしている。



高校生Kさんの作品

櫻井育子（生涯発達支援塾TANE 代表）

宮城県在住、1979年生まれ。水瓶座。書家、書道ファシリテーター、生涯発達コーディネーター。

「違いは魅力」をテーマに発達・心理・文化芸術・教育・福祉のつなぎめをコーディネート。

「つなぎめを学ぶ講座」、 「旅する書道塾tane」も開催中。 <http://ikuko-sakurai.com>